

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

英国のセミナー文化に見る人類学的な知のありかた

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古川, 不可知 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009506

英国のセミナー文化に見る 人類学的な知のありかた

文・写真 古川 不可知

本稿は、2019年1月27日から2月8日にかけて英国にておこなった研究動向調査の報告である。この調査の主要な目的は、筆者のテーマである道と移動する身体をめぐる研究の、英国における動向を調査することであった。ただしこの論点に関しては、『民博通信』164号に掲載された「インフラストラクチャーをめぐる人類学的研究の動向」、および本号に掲載の「移動の物質的側面を追って」と内容が重複するため、本稿では人類学的な知が生み出される場としての英国の人類学セミナーについて現在の状況を報告したい。

英国社会人類学におけるセミナー文化

周知のとおり人類学の部局を擁する英国の多くの大学では、週にいちど関係者が一堂に会し、1名の研究者の報告をめぐる討議をおこなうセミナーが開催されている。大学によってセミナーの名称は若干異なっているものの、以下では便宜的に人類学セミナーと総称する。筆者は上記の渡航期間中に、3大学（マンチェスター、エディンバラ、アバディーン）にて計4回のセミナーに出席することができた。日時とテーマは表1に掲げたとおりである。

セミナーではいずれも60分前後の研究発表ののち、同程度の質疑時間を設けて議論がおこなわれる。参加した限りではすべての発表で、ペーパーを読み上げながら関連写真をスライド投影するという形式がとられていた。いずれの回も、出席者のほとんどは学内のスタッフおよび大学院生であったが、筆者のような部外者も自由に参加することができる。

口の字型の座席配置で教員や院生が対等に発言するマンチェスター大学（参加者約30名）や、発表者が演台から講義形式でプレゼンテーションをおこない、拳手で質疑を受け付けるエディンバラ大学（同約40名）、教員を中心に少数の参加者のみが集まって長めの踏み込んだコメントをしあうアバ

ディーン大学（同約10名）など、同趣旨のセミナーであってもそのスタイルや規模および雰囲気は少しずつ異なるものであった。

1月31日に参加したアバディーン大学のセミナーでは、マリソル・デ・ラ・カデナの存在論に影響を受けて複数世界をめぐる議論を展開した発表者に対して、ティム・インゴルドが「一つの世界の人類学（one world anthropology）」を強調しながら、「人間やあらゆる存在者は同一の世界から生起することを念頭に置くべき」と反論するなど、世界の人類学のトレンドは良くも悪くもこうした英語圏の局所的な議論のなかから生まれてくることに筆者は改めて感銘を受けた。

人類学セミナーの現在の傾向

そこで現在の英国における議論の動向を広く把握するために、筆者が出席した3大学に加え、英国で主要な人類学の部局を持つオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、東洋アフリカ研究学院（SOAS）、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）の8大学について、2019年の春学期（1月～3月）におこなわれたすべてのセミナーから、地域・テーマ・発表者の属性について傾向を拾ってみた。

大学院生の論文執筆セミナーなどに充てられた回を除くと、開催されたセミナー回数は合計68回となった。発表の研究対象地域としては、表2に掲げたとおりアジアがもっとも多く、中南米とヨーロッパが続く。発表タイトルに現れる単語の頻度分析からは、顕著なキーワードを抽出することはできなかったものの、国家や政治を主題とする発表が多い印象を受ける。なお発表者の所属は学内者20名、英国他大学29名、海外19名であった。

表1 筆者の参加したセミナー

日付	大学	講演者	タイトル
1/28 (月)	マンチェスター	Dr. Nina Holm-Vohnsen (Aarhus University)	"Mars, Polydomes, Other Digressions in Political Thinking"
1/31 (木)	アバディーン	Dr. Chuck Sturtevant (University of Aberdeen)	"The Hill at the End of the World: How Projects That Produce 'The State' Resist Uncertainty"
2/1 (金)	エディンバラ	Dr. Aaron Kappeler (The University of Edinburgh)	"The Devil and Florentino: Specters of Petro-Populism in Venezuela"
2/4 (月)	マンチェスター	Dr. Veronica Strang (Durham University)	"Bringing the Anthropology of Water into International Policy: A Project with the United Nations"



古川 不可知 (ふるかわ ふかち)

国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員。専門は文化人類学、ヒマラヤ地域研究。著書に『「シェルバ」と道の人類学』（亜紀書房 2020年）、共訳書『ソウル・ハンターズ—シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』（亜紀書房 2018年）などがある。



マンチェスター大学のセミナー風景（2019年1月28日）。

人類学セミナーという知のありかた

かつてアルフレッド・ジェルは英国のセミナー文化のエキサイティングさを情熱的な筆致で描き出し、人類学セミナーの意義とは、「社交の機会であるとともに試合、試練にして通過儀礼」であり、「毎週のセミナーのない人類学部は心臓のない身体ようだ」と述べてその重要性を強調していた（Gell 1999: 1-3）。

一方で名和（2006: 105）も報告しているように、セミナーの形式をめぐるのはたしかに一定の不満が生じていることもうかがえた。筆者の短い滞在期間中にも、大学院生にはセミナーでコメントすることが半ば義務化されているため、表面的な議論にとどまり面白くない（から出席しない）とい

った意見も一部の学生から聞かれた。

それでも人類学セミナーそのものは重要であるという認識自体は共有されているようである。ふたたびティム・インゴルドによると、彼が1999年にマンチェスター大学からアバディーン大学に移った際、1番はじめに着手した作業が人類学セミナーの組織であると述べていた。アバディーン大学を北方研究（シベリアやスカンジナビア半島、カナダ北部など）の拠点にすることを志して赴任した彼は、当時はさまざまな部局に散在していた人類学者たちを、セミナーの開始によって糾合したのだという。

日本では人的・時間的リソースの問題もあり、週にいちどという頻度でのセミナー開催が困難であることは承知している。とはいえ人類学的な知を共同で産出し、ともすれば新たな潮流を生み出す制度の理念型として、英国の人類学セミナーは大いに参考になろう。ひとまずは限られた滞在期間からの報告となったが、今後も折を見て渡英と資料の収集を重ね、テーマの変遷などについて分析を続けていきたいと考えている。

表2 人類学セミナー発表の研究対象地域（数字：件数）

地域	アジア（東・東南・南）	15
	中南米	9
	ヨーロッパ	8
	アフリカ	6
	超域	5
	北米	3
	中東	3
	オセアニア	1
それ以外	理論研究	6
	実験室など	3
	その他／不明	9
合計		68

参考文献

- 名和克郎 2006 「イギリス『社会』人類学の内実をめぐる—2002-3年のケンブリッジを例に」『国立民族学博物館研究報告』31(1): 87-115。
Gell, A. 1999 *The Art of Anthropology: Essays and Diagrams*. Oxford: Berg.